教育現象に於ける權威

三枝樹正道

一

教育の最もすなをな、而も基本的なる樣相は、家庭教育に於て、これを發見することが出來る。卽ち、家庭に於て眞に教養ある父母が慈愛深き生活の裡に、その子女を育成する相こそ、眞の教育の典型と云ふべきである。勿論學校は教育を專門的に作爲する機關である。が然し、學校は一つの機關であつて、その爲に反つて生命現象としては、それだけに間接的である。

本來教育は人格と人格とが直接的接觸に於て、卽ち、一つの生命の地盤の上に於て始めてその勝義の作用を顯現するものである。蓋し教育は人格の本質に於ける生命と生命との交涉である。故に家庭に於ける親子の關係は、タトヒ教育的關係としての外觀的なる表現形式を具備せざる場合ありとするも、その內面的基本的關係に於ては、最も自然的本質的教育關係が行はれてゐるものにして、從つて家庭に於ける父母の教育的感化は、實に偉大なるものがあるのである。又單に指導すると云ふ點に於ては、家庭は學校に比して劣つてゐるかも知れない。然し眞の指導は寧ろ環境の整理によつて、良き雰圍氣に浸らしむるに如かないものである。卽ち權威ある指導者が不斷に良き刺戟を與へて、

被指導者をして自發的にそれに隨順せしむるものでなければならない。この意味に於ては、學校よりも家庭の方が、內外なき指導が可能であると云ふことが出來る。但しこの場合、その指導の中心となるべきものは、實に親の權威である。而して更にこれを極言すれば、その親を通じて顯現する祖先の慈愛心である。

二

サテ教育現象に於て、最も重要なる因素をなすものは、教育者の教育愛である。卽ち兒童の本質的なる發育への無限純眞なる愛である。元よりこれは親のその子に對する態度に於て多く發現するものではあるが、決して單なる本能的なる所與としての愛ではなく、實に教育的課題としての愛である。從つてこの愛をして眞の理想的なる、在るべき相に於て活動せしむる爲には、他方に教育者としての、親としての權威が無ければならない。實に權威を缺如せる愛は稍もすると溺愛に陷り易い傾向を有するものである。然らば權威とは如何なるものであらうか。

三

權威とは「秩序を維持する必須條件であり、指導を行ふ必須的手段である」(篠原)と云はるゝが、確かに權威は一面に於て秩序を維持し、指導するに必要なる力である。然し教育作用に於て要請せらるゝ權威は、腕力、武力、權力、財力等と云はるゝ、人格の外部より人格に附加されたる如きものではない。これは人格の內部より湧き出づる德であり、光である。更に又權威は前述の種々なる力の如く、自己の奮鬪努力精進のみによつて、これを獲得し增大することの出來るものではなくして、自己より以上なる價値的存在者、その最高に於ては絕對至純なる神佛へ信順歸依することに於て、自らその人格內に發生育成せらるゝ德である。從つて權威は單に自己の努力のみによつては顯現するも

のではない。常により以上の價値的存在者に至心に歸依するところに、自ら內に備はる德である。かゝる意味に於て人格より湧き出づる內發的な力とも云ふべきである。

サテかくの如く權威は內より發する光、人格の內發的なる德の顯現であるが、元より自然的なる所與ではない。從つて何人に於ても、何處に於てもこれを見出すことの出來るものではない。これに反して權力、腕力、財力等は、人格の外部より附加することの出來る力である。茲に權威の教育上重要なる地位が存在するのである。「眞の權威は兒童の心中に畏敬の情を喚び起し、畏敬の情から眞の服從は生ずる」(パウルゼン)と云ふが、實にかゝる意味の權威と服從によつて始めて眞の教育は行はるゝのである。權威は服從を要請すると云ふも、それは權威そのものが實に至高なる表現の服從であるからである。

四

抑も權威は人格より湧き出づる德であり、光であると云ふは、卽ち前述の如くその至高なる限りに於ては絕對至純なる神佛、宇宙的大人格に觸れ得たる人に於て、始めて汲み出し得る德を云ふのである。人は總べて人格を有するものであり、その意味に於て同格である。神佛より眺むる時は同樣に赤子である。而も各個人は神佛の惠みを受くる度合を異にするものである。これは神佛の惠みを自覺する程度の差であると云ふことが出來る。柳綠花紅の客觀的事實は嚴然とした事實にして普遍的現象でありとするも、これを受納する各個人の主觀はこれらの客觀に對して常に必ずしも同一の關係を保持するものとは云ふことが出來ない。茲に謂ゆる證悟の差、人格の高下、教養の程度も發生するのである。權威も亦これと同樣に絕對至高なる聖價値、卽ち神佛に直參し得たるものによつてのみ、その程度に應じ

て汲み出すことの可能なる德であり光である。換言すれば、權威とは神佛の德の個人の人格を通じて顯現したる相にして又神佛の德の個人の人格を通じて輝く反映である。從つてそれを通ずべき個人の人格に於て、不純なるものが多ければ多い程、これを通じて顯現する神佛の德は、その光を減弱するものである。これに反して又、その個人の人格が純眞なるもの程、その反射さるゝ神佛の光は、完全なる反射光を出すものである。

かくの如く、權威は、單に個人の力の顯現ではなくして、又個人の人格固有の光でもなく、寧ろ個人が個人の人格的特殊性を空虛にして、絕對至高なる存在、個人格の基底たるべき大人格、卽ち神佛に直參し、その德光を充分に反映すればする程、增大する光であり、又德である。

今これを敎育者の場合に就て考へて見るに、敎育者は神佛に純信歸依隨順することによつて、眞にその人格は養はるゝのである。かゝる人は、それ以上に、何ものも附加すること無くして、自ら神佛の德を、自己に反映するのである。從つてかゝる敎育者は、被敎育者に眞の服從を受くるものである。かゝる相を敎育的權威の發露と云ふべきである。實に權威は自ら絕對なるもの、至高なるもの、神佛へ服從隨順するところに、自ら自己の人格內に發生し來る光である。この光によつて子女は又育くまれ生長して行くのである。

かく考察し來るとき、家庭に於ける親こそは、極めてすなをに而も純眞に、その祖先の信仰を通じて神佛に直參しうる者であることを知る。而して絕對至高なる神佛の慈愛心、悠久の祖先からの指導力は、この親の祖先への崇信隨順を通じて、一つの權威となり、かくて始めて現實の光となり、德となつて子女を育くむのである。茲に吾國家庭敎育の一大特質があるのである。家督を中核とせる縱の血統を重視する吾國の家族制度に於てこそ、かゝる意味の理想

的にして極めて現實的なる宗教々育が行はるゝのである。これは決して二三世紀前に西洋に於て行はれた謂ゆる權勢に重點を置いた權威の教育とは全然同一範疇に於て論ずることの出來ない眞の教育である。

五

尙ほ終りに權威と權力との關係に就て一言するに、これらは何れも一つの社會的勢力ではあるが、後者は被教育者をして、恐怖・威壓を感ぜしむるものであり、その構成因素となるべきものは、世俗的なる力、卽ち法規上定められたる統制力、經濟上築かれたる財力、形體上現れたる體力等にして、被教育者は、これらの力に對しては、總べて自ら下位にあるとの意識によつてのみ威伏せられるのであつて、時には反抗心さへも抱く場合がある。然るに之れに反して前者卽ち權威は、被教育者が進んで信服・隨順する對象にして、その構成因素となるべきものは、前述の如く教育者の人格內に修養、蓄積されたる德である。而して被教育者は、この權威者に對して自ら下位にあることを意識しつゝ、それに服從し、更に進んでは模倣して、これに至らんことを衷心より求むるものである。但し權威は權威者がこれを自ら誇示せんとする場合には權力化するものにして、權力は又それを持續する時間の長き場合、卽ち經驗の集積として人格化せる場合には權威化するものである。